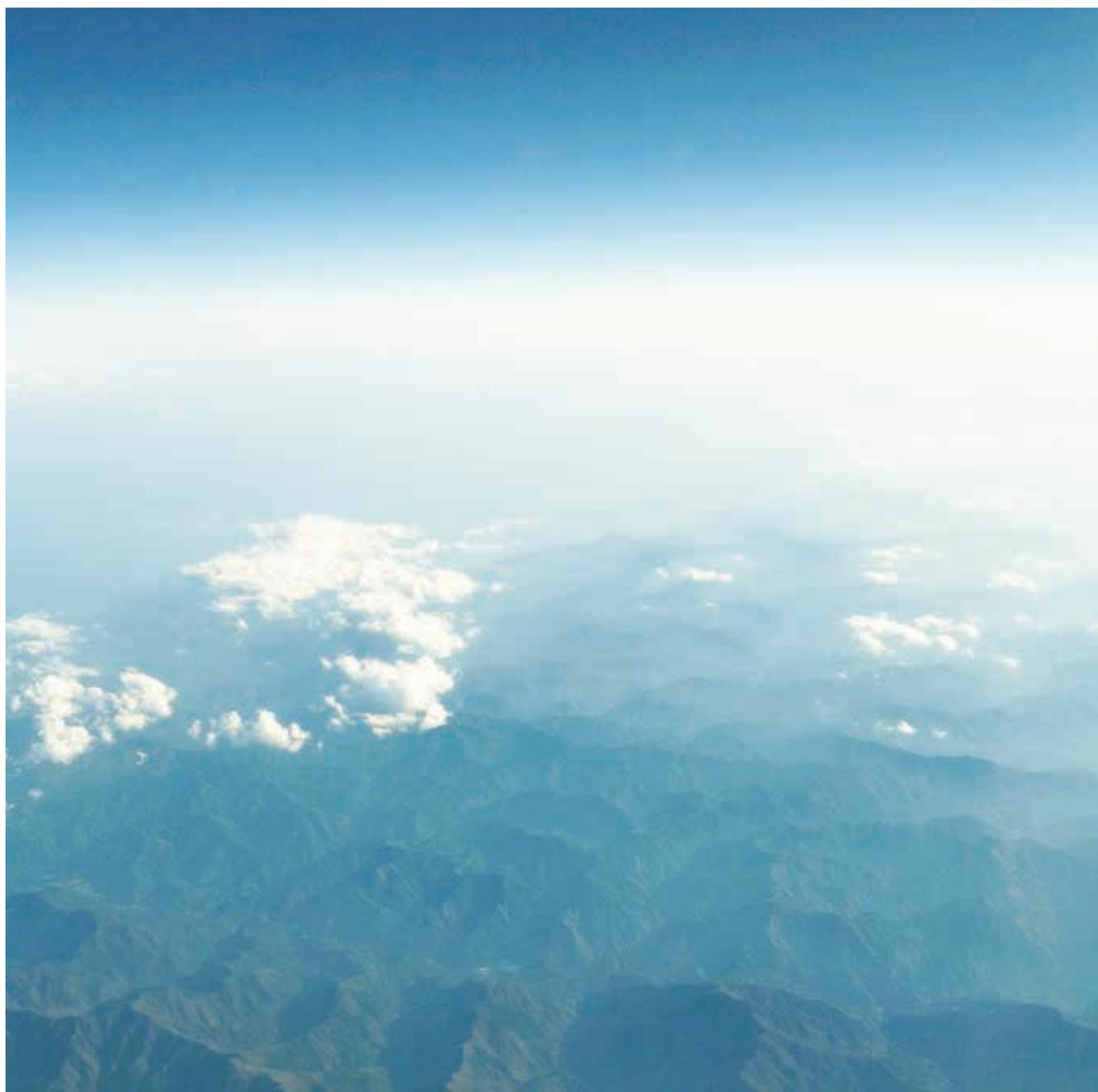


A s i a n J o u r n a l o f  
**H U M A N  
S E R V I C E S**

Printed 2012.1030 ISSN2186-3350  
Published by Asian Society of Human Services

*October 2012*  
**VOL. 3**



## ORIGINAL ARTICLE

# 特別支援教育に携わる教員のメンタルヘルスとSOC (Sense of Coherence)との関連

## Relationship between Teacher Mental Health that Involved in Special Needs Education and Sence of Coherence

森 浩平<sup>1)</sup> (Kohei MORI), 田中 敦士<sup>2)</sup> (Atsushi TANAKA)

1) 琉球大学大学院 教育学研究科

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1 琉球大学教育学部特別支援教育講座

ktv\_m\_kohei@yahoo.co.jp

2) 琉球大学 教育学部

### ABSTRACT

本研究では、特別支援教育に携わる教員のメンタルヘルスとSOC(首尾一貫感覚)の関連について明らかにし、教員のストレス低減の方法を検討することを目的とする。特別支援学校教諭免許状を未取得で特別支援教育に携わる教員に対するメンタルヘルスチェックの結果から、教職経験年数の長いベテラン教員群は、若手教員群と比べ有意義感が低いことが明らかとなった。また、SOCはストレス尺度及び精神健康度GHQ28の下位尺度間において負の相関が得られた。これより、特別支援教育教員のメンタルヘルス改善のために、SOCの保持・増進の必要性が示唆された。

The purpose of this research is to disclose the teacher mental health of special needs education relating to sence of coherence and finding a way to reduce their stress. From the analysis result of mental health check of teachers that engaged in special needs education, it shows that the group of teachers with long years of teaching experience, the sense of meaningfulness is low compared with the group of young teachers. In addition, SOC had a negative association in stressor standard and GHQ(General Health Questionnaire).Than this to improve the mental health of special needs education teachers, the need for the maintenance and promotion of SOC was suggested.

Received  
September 18,2012

Accepted  
October 27,2012

Published  
October 31,2012

## &lt;Key-words&gt;

SOC, ストレッサー, 教員, 特別支援教育, メンタルヘルス

sence of coherence, stressor, teacher, special needs education, mental health

Asian J Human Services, 2012, 3:167-176. © 2012 Asian Society of Human Services

## I. 問題と目的

### 1. 教員のメンタルヘルスの現状

文部科学省の教育職員に関する統計調査(2011)により、全国の公立小・中・高校、特別支援学校などの教員約92万人のうち、病気休職者が8660名、そのうち精神疾患による休職者は5407名であり、病気休職者のうち62.4%が精神疾患を抱えていることが示された。

近年、多くの教員がストレスに悩まされる状況が続いており、文部科学省(2009)では「学校教育は教員と児童生徒との人格的な触れ合いを通じて行われるものであり、教員が心身ともに健康を維持して教育に携わることが重要である」と提言している。具体的な教員のメンタルヘルス対策が早急に求められており、同省は校務の効率化や教員の事務負担の軽減を進めるよう、都道府県教育委員会などに通知しているが、具体的なメンタルヘルスの対策は各教育委員会に任されている現状にある。

石川・中野(2001)が小・中学校・高等学校に所属する教員を対象に行った調査では、日常の仕事の中でストレスを「非常に感じる」あるいは「感じる」と答えた教員が半数以上を超えている(田上・山本・田中, 2004)。このような深刻な状況の中にあり、多くの教員のストレス改善のための研究が増え、教員のバーンアウト(燃え尽き症候群)に目を向けようといった動きが強まっている。こうした中で提唱された「教員バーンアウト」は特に教員に限定した概念で、「教員が、理想を抱き真面目に仕事に専心する中で、学校のさまざまなストレスに晒された結果、自分でも気づかぬうちに消耗し極度の疲弊をきたすに到った状態」と定義されている(田上・山本・田中, 2004)。

教員のストレスの要因として高木・田中(2003)は職務自体・職場環境・個人的(家庭内)の3つを挙げており、これらがバーンアウトと関連性があることを指摘している。このうち職場環境の影響によるストレスナーに関しては、役割葛藤・同僚との関係・組織風土・評価懸念の4因子25項目に分類がされている。

教職員の勤務の実態や意識に関する分析委員会(2008)が、沖縄県の公立小・中・高校、特別支援学校に在籍する本務職員12,760人を対象にした調査を実施した。その結果、「日頃、悩んでいること」について、「特になし」(29.4%)が最も多く、次いで「教員としての適性」(24.4%)、「子育て」(9.8%)、「自分の病気」(6.7%)の順であった。「教員としての適性」に悩んでいる教員の割合が約4分の1を占め、他の悩みに比べて特に多い結果となっている。

UNESCO(1966)による「教員の地位に関する勧告」では、教員の仕事を専門職として定義し、「厳しい継続的な研究を経て獲得される専門的知識及び特別な技術を要求する公共的業務」と規定している。障害児教育教員の「専門性」は、複雑な教育的ニーズを抱えた障害児の増加を踏まえ、通常教育教員との専門性の差異は量的な差異とともに質的な差異も包含している(清水, 2003)。

特殊教育から特別支援教育へと大きな転換が図られ、障害種の拡大や重度・重複化に伴う一人一人のニーズに応じた適切な指導・支援の要求水準の引き上げや、学校と福祉・医療・保健・労働機関等との連携など特別支援教育を担う教員に求められる専門性は非常に高まっている。こうした現状の中で特別支援教育に携わる教員のストレスも飛躍的に高まり、問題も年々深刻化している。

## 2. SOC (首尾一貫感覚)

1990年代以降、欧米や日本で SOC (Sense of Coherence) に関する研究が増加しており (小田, 1991; 高山・浅野・山崎ら, 1999)、SOC とストレスマネジメントとの関係や身体的・精神的健康度の関連 (depression, GHQ, QOL, physical conditions, etc) が示されている。

SOC とは、Antonovsky (1979) の提唱した健康生成論の中心的な健康生成要因で、非常にストレスフルな経験をしながらも健康に生きる人々が保有する生きる力とされている。この力は、問題が生じたときに自分の持っている様々な内的・外的な資源を動員する力であると説明されている。

SOC は 3 つの要素から構成されており、①自分が置かれている状況や、将来起こるであろう状況のある程度予測、理解できる把握可能感 (comprehensibility)、②どんな困難な出来事でも自分で切り抜けられるという感覚や、何とかできるという処理可能感 (manageability)、③自分の人生・生活に対して、意味があると同時に価値観を持ち合わせている感覚である有意味感 (meaningfulness) をいう (山崎・戸ヶ里・坂野, 2008)。このような 3 つの感覚をもって生活を送っている人は、ストレス状況に耐えうまく対処することができる、すなわち、ストレス対処能力が高いとされる。

特別支援教育に携わる教員の SOC について国内では調査されておらず、特別支援教育教員のストレスマネジメントに関する特性を知る手がかりになると考える。そこで、本研究では、特別支援教育に携わる教員のストレス要因及びメンタルヘルスと SOC の関連を明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査対象

特別支援学校教諭免許状未所得で、障害児の指導を担当している教員 102 名を対象に質問紙調査を実施した。

### 2. 手続き

2012 年 8 月 1 日の沖縄県教育職員免許法認定講習の休憩時において、調査の趣旨説明を行いプライバシーの配慮をしたうえで調査票を 102 名へ配布、同日中に 93 名から回収を行った。

### 3. 調査内容

質問紙調査の内容は以下の通りである。

#### (1) フェイスシート

回答者の基本属性

- ・性別
- ・年齢
- ・教職経験年数

フェイスシートでは、回答者の基本属性として性別・年齢・教職経験年数についてたずね、それぞれにおいてSOCにどのように関連しているのかを明らかにした。

#### (2) SOC (首尾一貫感覚)

SOCは、Antonovskyが作成したSOC英語版29項目尺度・13項目縮約版尺度(Antonovsky, 1987)によって測定可能とされている。日本語版SOC短縮版尺度(山崎, 1999)は、AntonovskyのSOC英語版13項目縮約版尺度を山崎らが翻訳し、信頼性・妥当性の検証がされている(山崎・高橋・杉原, 1997)。この尺度は13項目7件法で構成され、得点の高いものほどストレス対処能力が強いとされている。またSOCは、把握可能感覚(comprehensibility)、処理可能感覚(manage-ability)、有意味感覚(meaningfulness)の3つの下位概念から成っている。本調査では、この日本語版SOC短縮版尺度を用いる。

#### (3) ストレッサー尺度

高木・田中(2003)の先行研究で使用されたストレッサー尺度を用いる。鈴木・別惣・岡東(1994)の役割曖昧性・役割葛藤尺度、橋本(1997)の対人ストレスイベント尺度、牧(1999)の学校経営診断マニュアルから構成されており、それぞれ信頼性・妥当性ともに確認されている。本尺度は、「役割葛藤」「同僚との関係」「組織風土」「評価懸念」の4因子、25項目から成り、「1. 全くそうでない」「2. そうでない」「3. そうである」「4. とてもそうである」の4件法で回答し、項目の評定値を加算した値が得点となる。

#### (4) 精神健康度 GHQ28 (中川・大坊, 1985)

ゴールドバーグ(Goldberg, D.P.)が神経症、心身症を中心とする非器質性、非精神病性の疾患の病状把握、スクリーニング・テストとして60項目からなる質問紙を英国で開発した。因子分析の結果をもとに28項目版、30項目版などの短縮版も作成されている。本調査では、GHQ28項目版を使用する。信頼性・妥当性の吟味がよくなされており、実施・採点の簡便性、判別効率、適用範囲の広さなどから精神科、内科、学校、企業などで広く用いられている。28項目から成り、4件法で回答を求め、「0-0-1-1得点法」で得点化する。精神健康度は、0~28点の得点で精神健康状態が判断される。精神健康度得点が0点に近づくにつれて精神健康状態は良好であり、6点以上の得点になると、精神健康状態が悪いとされる。さらに、28点に近づくにつれて神経症者として診断される。

### III. 結果

#### 1. フェイスシート

##### (1) 回収率

本研究における調査のアンケートの回収数は102名中93名で、回収率は91.2%であった。また、欠損値についてはペアごとに除外して分析を行った。

内訳は、男性21名(22.6%)、女性62名(66.7%)、不明10名(10.8%)であった。

##### (2) 回答者の年齢

回答者の年齢については、「40歳以上45歳未満」と回答した人が一番多く、25名(26.9%)であった。次いで、「35歳以上40歳未満」が16名(17.2%)、「30歳以上35歳未満」が14名(15.1%)、「45歳以上50歳未満」が14名(15.1%)、「50歳以上55歳未満」が7名(7.5%)、「25歳以上30歳未満」が6名(6.5%)、「55歳以上」が3名(3.2%)、「25歳未満」が0名(0.0%)、不明は8名(8.6%)であった。

##### (3) 回答者の通算教職経験年数

回答者の通算教職経験年数の平均は15.3年±7.1年であった。最大は30年7か月、最小は4年であった。

通算教職経験年数が1年から10年未満の教員を「若手教員群」、10年以上20年未満の教員を「中堅教員群」、20年以上の教員を「ベテラン教員群」とした結果、「若手教員群」は26名(30.6%)、「中堅教員群」は33名(38.8%)、「ベテラン教員群」は26名(30.6%)となった。

#### 2. SOC

##### (1) 男女差の比較

男女差の検討を行うために、SOCについてt検定を行った。表1に男女別の各平均点等を示す。その結果、男女の得点差は有意ではなかった。

表1 男女別の平均値とSDおよびt検定の結果

	男性 (n=21)		女性 (n=62)		t 値	
	平均	SD	平均	SD		
把握可能感覚	21.52	5.27	21.08	5.57	0.32	n.s.
処理可能感覚	16.76	3.95	16.58	4.08	0.18	n.s.
有意味感覚	19.10	4.80	20.23	3.91	1.08	n.s.
SOC 合計	57.38	12.68	57.89	11.25	0.18	n.s.

## (2) 通算教職経験年数の比較

通算教職経験年数の3つのグループ「若手教員群」「中堅教員群」「ベテラン教員群」を独立変数、SOCを従属変数とした分散分析を行った。その結果、「有意味感覚」において、 $F(2, 82)=1.77$ であり5%水準で有意な群間差がみられ、「若手教員群」>「ベテラン教員群」という結果が得られた。

表2 3群のSOC平均点

	<i>n</i>	把握可能感覚	処理可能感覚	有意味感覚	SOC合計
若手教員群	26	23.19±4.05	17.81±3.93	21.08±3.33	* 62.08±9.62
中堅教員群	33	20.42±5.95	16.85±3.43	19.06±4.36	
ベテラン教員群	26	20.00±5.84	15.04±4.54	19.81±4.45	
<i>F</i>		2.74	3.32	1.77	2.96
<i>p</i>		<i>n.s.</i>	<i>n.s.</i>	*	<i>n.s.</i>

\*  $p < 0.05$ 

## 3. 尺度間の関連

## (1) SOCとストレッサー尺度

SOC(3下位尺度)とストレッサー尺度(4下位尺度)について下位尺度得点間のPearsonの積率相関係数を求めた(表3)。

その結果、「把握可能感覚」と有意な相関が得られたストレッサー下位尺度は「役割葛藤」( $r=-0.476, p<0.01$ )、「同僚との関係」( $r=-0.393, p<0.01$ )、「組織風土」( $r=-0.341, p<0.01$ )、「評価懸念」( $r=-0.550, p<0.01$ )、「処理可能感覚」と有意な相関が得られたのは「役割葛藤」( $r=-0.529, p<0.01$ )、「同僚との関係」( $r=-0.460, p<0.01$ )、「組織風土」( $r=-0.340, p<0.01$ )、「評価懸念」( $r=-0.407, p<0.01$ )、「処理可能感」と有意な相関が得られたのは「役割葛藤」( $r=-0.375, p<0.01$ )、「組織風土」( $r=-0.329, p<0.01$ )、「評価懸念」( $r=-0.338, p<0.01$ )であった。「有意味感覚」と「同僚との関係」においてのみ有意な相関はみられなかった。

表3 SOCとストレッサー尺度との相関

尺度名	下位尺度	ストレッサー尺度			
		役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
SOC	把握可能感覚	-0.476**	-0.393**	-0.341**	-0.550**
	処理可能感覚	-0.529**	-0.460**	-0.340**	-0.407**
	有意味感覚	-0.375**	-0.196	-0.329**	-0.338**

\*\*  $p < 0.01$ Received  
September 18, 2012Accepted  
October 27, 2012Published  
October 31, 2012

## (2) SOC と GHQ (精神健康度)

SOC (3 下位尺度) と GHQ (精神健康度) について尺度得点間の Pearson の積率相関係数を求めた (表 4)。

その結果、「把握可能感覚」と有意な相関が得られた GHQ 下位尺度は「身体的症状」( $r=-0.473, p<0.01$ )、「不安と不眠」( $r=-0.610, p<0.01$ )、「社会的活動障害」( $r=-0.469, p<0.01$ )、「うつ傾向」( $r=-0.323, p<0.01$ )、「処理可能感覚」と有意な相関が得られたのは「身体的症状」( $r=-0.493, p<0.01$ )、「不安と不眠」( $r=-0.515, p<0.01$ )、「社会的活動障害」( $r=-0.325, p<0.01$ )、「うつ傾向」( $r=-0.354, p<0.01$ )、「処理可能感」と有意な相関が得られたのは「身体的症状」( $r=-0.310, p<0.01$ )、「不安と不眠」( $r=-0.430, p<0.01$ )、「社会的活動障害」( $r=-0.422, p<0.01$ )、「うつ傾向」( $r=-0.433, p<0.01$ ) であった。

表 4 SOC と GHQ の相関

尺度名	下位尺度	GHQ			
		身体的症状	不安と不眠	社会的活動障害	うつ傾向
SOC	把握可能感覚	-0.437**	-0.610**	-0.469**	-0.323**
	処理可能感覚	-0.493**	-0.515**	-0.325**	-0.354**
	有意味感覚	-0.310**	-0.430**	-0.422**	-0.433**

\*\* $p<0.01$ 

## 4. 因果関係の検討

## (1) GHQ (精神健康度) を従属変数とした重回帰分析

SOC が GHQ (精神健康度) に与える影響を検討するために、重回帰分析を行った。結果を表 5 に示す。また、重回帰分析に基づくパス図を図 1 に示す。

ステップワイズ法で重回帰分析を行った結果、調整済み  $R^2$  値は 0.448 となり、一定程度の説明力を有するモデルであることが示された。ベータ ( $\beta$ ) 値の絶対値が大きい方が GHQ への影響力が高いとされており、把握可能感覚 ( $\beta=0.330$ ) が最も高く、次に処理可能感覚 ( $\beta=0.263$ )、有意味感覚 ( $\beta=0.202$ ) となった。

表 5 重回帰分析結果 (標準化係数 ( $\beta$ ))

	標準化係数 ( $\beta$ )	t 値	有意確率
把握可能感覚	0.330	2.79	0.00**
処理可能感覚	0.263	2.47	0.02*
有意味感覚	0.202	2.07	0.04*

従属変数 : GHQ

\*  $p<0.05$  \*\*  $p<0.01$

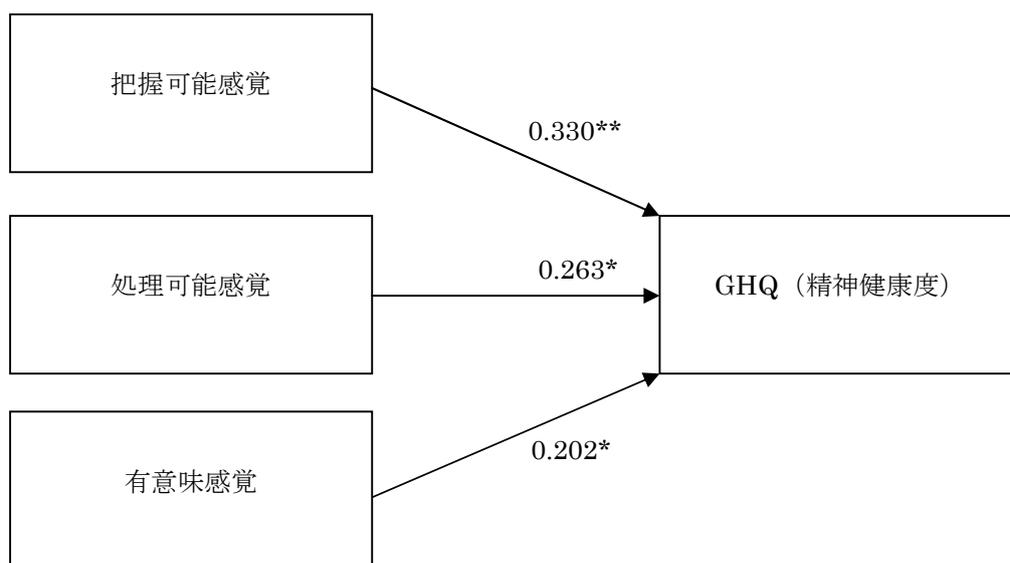


図1 重回帰分析結果 (パス図)

#### IV. 考察

##### 1. 男女差・教職経験年数の比較

男女差の検討を行うために、SOCについて  $t$  検定を行った結果、男女の得点差は有意ではなかった。また、通算教職経験年数の3つのグループ「若手教員群」「中堅教員群」「ベテラン教員群」を独立変数、SOCを従属変数とした分散分析を行った結果、SOCの下位尺度「有意味感覚」においてベテラン教員よりも若手教員の方が有意に高かった。これは、ベテラン教員は若手教員に比べ、自分の人生や生活に対して意味があると感じることができていないということである。

SOCは遺伝的な生得能力ではなく、経験によって生成する後天的な資質であるとされている。また、SOCを強くするものとして、汎抵抗資源 (Generalized Resistance Resources : GRRs) が挙げられている。これは、特定でなく多様なストレスに対応するための資源のことで、資金、知識、自我の強さ、ソーシャルサポート、文化的な安全性などを含む。これらにより、「一貫性 (consistency)」、「バランスのとれた負荷 (underload-overload balance)」、「結果の形成への参加 (participation in shaping outcome)」に特徴付けられる良質な人生経験がもたらされ、それによってSOCが強化されると言われており、さらに、この繰り返しがSOCを形成するとされている。有意味感覚の成長には、「社会的に価値ある意思決定への参加」が重要であり、これは仕事上の喜びや誇りと関係している (Antonovsky, 1987)。すなわち、職場において汎抵抗資源を得られ、良質な人生を経験できるような環境であれば、職場に就いた後でもSOCは成長し、ストレスに対して適応することが可能になると予想される。また逆に、そのような環境を与えなければ、SOCは低下して不適応な状態に陥る可能性もあると考えられる。

このように、経験によって強化されると考えられる有意味感覚であるが、教職経験におい

ては経験年数が長いベテラン教員の方が有意味感覚は低かった。長年にわたる長時間労働や、責任のある職務を任せられることによる高負荷・心身の消耗により、職務への意欲低下も考えられる。また、教員にとって、昇進・昇格や給与の変化があるわけではなく、教員の職場組織では、各人の希望に沿ったキャリア・コースが用意されているとは言えない。ポストや活躍の場がほとんど用意されていないなか、教員それぞれが職務への意欲や向上心を保ち続けることは困難になっていくのではないだろうか。こうした職場環境により、汎抵抗資源が得にくく、有意味感の低下につながっていると考える。

## 2. 尺度間の関連と GHQ（精神健康度）を規定する要因の検討

SOC の下位尺度「把握可能感覚」「処理可能感覚」「有意味感覚」とストレッサー下位尺度「役割葛藤」「同僚との関係」「組織風土」「評価懸念」の相関をみると、「有意味感覚」と「同僚との関係」以外のすべての下位尺度間において負の相関がみられた。これは、SOC、つまりストレス対処能力が高ければ高いほど、各ストレッサーが軽減されることを示している。

また、SOC の下位尺度「把握可能感覚」「処理可能感覚」「有意味感覚」と GHQ 下位尺度「身体的症状」「不安と不眠」「社会的活動障害」「うつ傾向」の相関をみると、すべての下位尺度間において負の相関がみられた。これは、SOC が高ければ高いほど、各メンタルヘルスの状態が良好となることを示している。また、重回帰分析の結果より、教員のメンタルヘル스에影響を及ぼすのは順に、「把握可能感覚」「処理可能感覚」「有意味感覚」であるというモデルが構築された。

SOC は深刻なストレッサーに遭遇しても、むしろそれを成長の糧とし、かつ良い健康状態を保っている人々が共通してもつ特徴として見つけ出されたものである。SOC はストレッサーからストレスを受けてストレス状態に至る過程のいずれにも強い抑制力を持ち（山崎, 2003）、看護師や医療職者を対象とした研究においても、SOC が強い人ほどストレスが少ない（本江・星山・川口, 2003）など、SOC の効果が示されている。こうした報告と同様に、特別支援教育に携わる教員においても、SOC のストレス対処能力としての機能を裏付ける結果であったと考えられる。特別支援教育教員のメンタルヘルス改善のため、SOC の保持・増進の必要性が示唆された。

## 付記

本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「特別支援教育にかかわる教員の専門性とメンタルヘルスとの関連に関する実証的研究（研究代表者；田中敦士 課題番号 21531032）」の助成を受けて行った。調査に協力くださいました学校教員の方々および情報提供を頂きました研究協力者の皆様方に感謝いたします。

## 文献

- 1) Antonovsky A(1987) Unraveling the Mystery of Health:How people Manage Stress and Stay Well Jossey-Bass Publishers, 189-194/山崎喜比古・吉井清子監

- 訳(2001) 健康の謎を解くーストレス対処と健康保持のメカニズムー 有信堂
- 2) Antonovsky A(1979) Health,Stress,and Coping:New Perspective on Mental and Physical Well-being Jossey-Bass Publishers, 182-197.
  - 3) 橋本剛(1997) 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究 13, 64-75.
  - 4) 本江朝美・星山佳治・川口毅(2003) 看護学生の体験学習に対する意識と行動と Sence of Coherenc との関連に関する研究 昭和医学会誌, 63(2), 130-141.
  - 5) 石川正典・中野明德(2001) 教師のストレスとサポート体制に関する研究 福島大学教育実践研究紀要第, 40, 17-24.
  - 6) 教職員の勤務の実態や意識に関する分析委員会(2008) 教職員の勤務の実態や意識に関する調査報告書
  - 7) 牧昌見(1999) 学校経営診断マニュアル 教育開発研究所
  - 8) 文部科学省(2011) 平成 22 度教育職員に係る懲戒処分等の状況について
  - 9) 文部科学省(2009) 文教・科学技術施策の動向と展開 文部科学白書
  - 10) 中川泰彬・大坊郁夫(1985) 日本版 GHQ 精神健康調査票〈手引き〉日本文化科学社
  - 11) 小田博志(1991) サリュートジェネシスとストレス 現代のエスプリ別冊 39-49
  - 12) 清水貞夫(2003) 障害児教育教師の専門性 障害者問題研究, 31(3), 178-188.
  - 13) 鈴木邦治・別惣淳二・岡東壽隆(1994) 学校経営と養護教諭の職務(II)-養護教諭の役割と「位置」の認知を中心にして-, 43, 153-164.
  - 14) 田上不二夫・山本淳子・田中輝美(2004) 教師のメンタルヘルスに関する研究とその課題 教育心理学年報, 43, 135-144.
  - 15) 高木亮・田中宏二(2003) 教師の職業ストレスに関する研究—教師の職業ストレスとバーンアウトの関係を中心に— 学術研究教育心理学編, 47, 57-72.
  - 16) 高山智子・浅野祐子・山崎喜比古・吉井清子・長阪由利子・深田順・古沢有峰・高橋幸枝・関由起子(1999) ストレスフルな生活出来事が首尾一貫感覚と精神健康に及ぼす影響 日本公衆衛生雑誌, 46, 965-976.
  - 17) UNESCO(1966) Recommendation Concerning the Status of Teachers ILO/UNESCO
  - 18) 山崎喜比古(1999) 健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念 SOC Quality Nursing, 5(10), 81-88.
  - 19) 山崎喜比古・高橋幸枝・杉原陽子(1997) 健康保持要因 Sence of Coherence の研究 (1)SOC 日本語版スケールの開発と検討 日本公衆衛生雑誌, 44(10), 243.
  - 20) 山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子(2008) ストレス対処能力 SOC 有信堂
  - 21) 山崎喜比古(2003) ストレスの進行と防止の過程徹底分析 データブック NHK 現代日本人のストレス, 177-200.

Received  
September 18,2012

Accepted  
October 27,2012

Published  
October 31,2012

## CONTENTS

### REVIEW ARTICLES

- How Did 'Difficult to Involve' Parents Emerge in Early Childhood Care and Education?  
-A Discussion of Research Trends on Family Support and Relationship with Guardians..... **Tetsuji KAMIYA** • 1
- The Review of the Studies on the Fall Prevention Exercise Programs for Elderly Persons..... **Jaejong BYUN** • 16
- Current issues in driver's license of people with intellectual disabilities..... **Atsushi TANAKA** • 32

### ORIGINAL ARTICLES

- The Changing Characteristics of In-home Care Service Providers in the U.S. and in the  
UK: Implications for South Korea ..... **Yongdeug KIM, et al.** • 38
- Assessing Training System for Social Service Workers in South  
Korea: Issues and Policy Agenda ..... **Jaewon LEE, et al.** • 60
- Relationship between depression and anger ..... **Noriko MITSUHASHI, et al.** • 77
- Workaholism Determinant Variables of Social Workers and Care Workers  
in Senior Welfare Centers in Korea ..... **Jungdon KWON, et al.** • 87
- The Exploration of Financial Resources of Financial Adjustment System  
and Social Welfare in Japan ..... **Haejin KWON, et al.** • 105
- Relation between the importance of school education and after-school activity programs  
and age, sex, and school type for school-aged children with disabilities..... **Hideyuki OKUZUMI, et al.** • 131
- A Study on the Vitalization of Silver Industry by Analyzing the Needs of Silver  
Industry in the Daejeon, South Korea ..... **Gowhan JIN** • 138
- A Comparative study on Factor Analysis of the Disabled Employment between  
Japan and Korea ..... **Moonjung KIM, et al.** • 153
- Relationship between Teacher Mental Health that Involved  
in Special Needs Education and Sence of Coherence ..... **Kohei MORI, et al.** • 167

### SHORT PAPERS

- The Analysis of Disaster Mitigation System and Research on  
Disaster Rehabilitation. .... **Keiko KITAGAWA, et al.** • 177
- The Trend of International Research on University Learning Outcome and  
Quality of Life and Mental Health of University Students  
..... **Changwan HAN, et al.** • 189
- The research trend and issue of hospital school in the education for the health impaired  
..... **Aiko KOHARA, et al.** • 198
- Bibliographical consideration about the current situation and the problem to be solved  
about cooperation between teachers in hospital classrooms and other staffs..... **Remi KAKUTANI, et al.** • 208
- The Current Status and Issues in Korean Barrier-Free General School  
..... **Eunae LEE, et al.** • 219

### CASE REPORT

- Approach for the problematic behaviors of autism complicated with severe and multiple disabilities  
~ a case study of a first year junior high school student in daily living ~  
..... **Kazumi SUGIO, et al.** • 229